

史跡齋宮跡 第167次調査現地説明会資料



倉庫と考えられる総柱の掘立柱建物(建物2・南から)

平成22年7月17日(土)

齋宮歴史博物館

1 はじめに

斎宮跡は、古代から中世にかけて、伊勢神宮に仕えた未婚の皇女・^{さいきう}斎王の宮殿および役所があった所です。昭和45年度から発掘調査が始められ、現在では、東西約2km・南北約700mの範囲が国史跡に指定されています。これまでの調査で、史跡の南西部には飛鳥・奈良時代の斎宮跡が、史跡東部には平安時代の斎宮跡があったことが判明しています。平安時代の斎宮跡は、幅12～15mの区画道路が基盤の目状に通り、東西7列・南北4列の地割（^{ほうかくちわり}方格地割）が敷かれていました。道路に囲まれた正方形の地割は一辺が約120mあり、この地割の中に、斎王の宮殿や様々な役所があったと考えられています。最盛期には500人を超える役人が勤めており、斎宮はさながら都のような風景であったと考えられます。

今回発掘調査を行った第167次調査区は、平安時代の斎宮跡のほぼ中央部分、^{やなぎはら}「柳原区画」と呼ばれる部分にあたります。「柳原区画」の南には、^{うしはひがし}「牛葉東区画」や^{かじやまにし}「鍛冶山西区画」があります。これらの区画では、かつて発掘調査を行った際に、大規模な掘立柱塀が確認されており、斎王の住む宮殿である^{ないいん}「内院」に想定されています。「柳原区画」は、平安時代の斎宮跡の中心に位置することや、「内院」に隣接することから、斎宮の中でも重要な機能があった場所と考えられています。平成19年度の発掘調査では、「柳原区画」の中心部分を調査し、四面^{ひし}庇付掘立柱建物や、大型の三面^{ひし}庇付掘立柱建物が確認されるなど、重要な建物群が見つかりました。今回の調査は、「柳原区画」の更なる実態解明に向けて、区画の北東部分約500㎡の発掘調査を行いました。

2 見つかった遺構

今回の調査では、掘立柱建物跡をはじめ、土坑や溝跡など多数の遺構確認しました。建物跡は、これまでに10棟確認しており、方格地割が造られた後の、平安時代前期（9世紀）から末期（12世紀）までのものと考えられます。

（平安時代の掘立柱建物）

建物は方向が主に、方格地割の方向（東で北に4°振る）に近い建物、東で北に2°振る建物、その他の方位の建物があります。

方格地割の方向に近い建物としては、SB9735・建物6の2棟があります。SB9735は152次調査で確認された5間×2間（^{けん}「間」とは柱穴の間の数を言います。）の東西方向の建物で、今回の調査では東側柱列を確認しました。9世紀初頭頃の建物と考えられます。建物6は調査区北東端に位置する5間×2間の南北方向の建物です。



第167次調査区

斎宮歴史博物館

古代伊勢道
(奈良古道)

いつきのみや
歴史体験館

御館

柳原

竹神社

牛葉東

鍛冶山西

飛鳥・奈良時代の斎宮

平安時代の方格地割

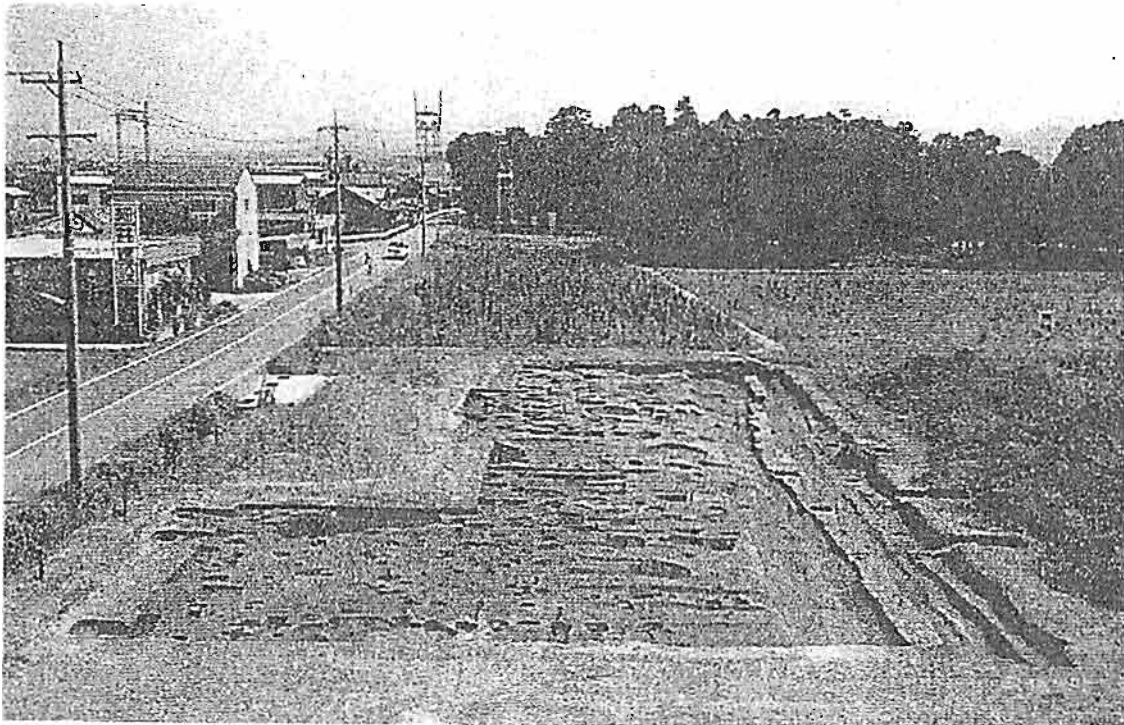
東で北に2° 振る建物は、SB9709・SB9712・建物2～5の6棟が確認されています。SB9709は5間×2間の東西方向の建物です。建物2は、3間×3間の総柱の掘立柱建物です。建物内部にも柱を設置していることから、大きな重量にも耐えられる高床の倉庫と考えられます。建物3・4は5間×2間の東西方向の建物で、柱掘形が重複していることから、建替えが行われたものと考えられます。建物3の柱痕には拳大の石が入れられており、建物廃絶後に祭祀行為が行われた可能性が考えられます。建物5は、5間×2間の南北方向の建物です。SB9709・建物5は、柱掘形が大きいもので一辺1m近くあり、大型の建物であったと考えられます。

また、その他の方位軸の建物として、建物1・7の2棟が確認されています。
(平安時代の^{どこう}土坑)

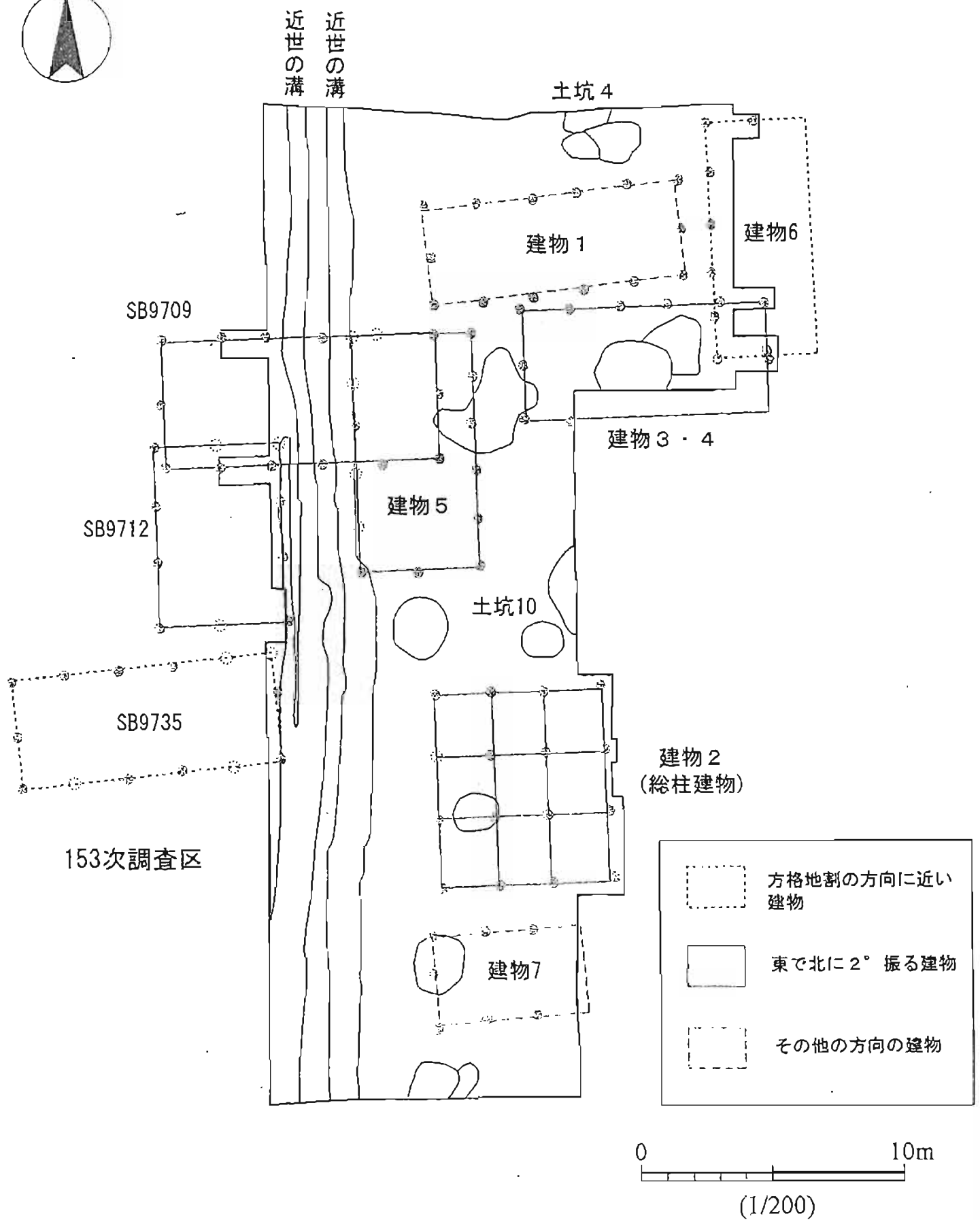
今回の調査では、直径2～3m前後の楕円形をした土坑を多数確認しました。これらの土坑は、いずれも深さが30cm程度と浅く、土師器など土器の小片を多く含んでいました。調査区北端に位置する土坑4では、土師器皿・碗などが出土しており、9世紀初頭のものと考えられます。

(近世の溝)

調査区の西側で、南北方向の近世溝群を確認しました。この部分を境に、東側が「字西加座^{にしかがざ}」、西側が「字柳原^{やなぎはら}」となっており、字境に掘られた溝と考えられます。



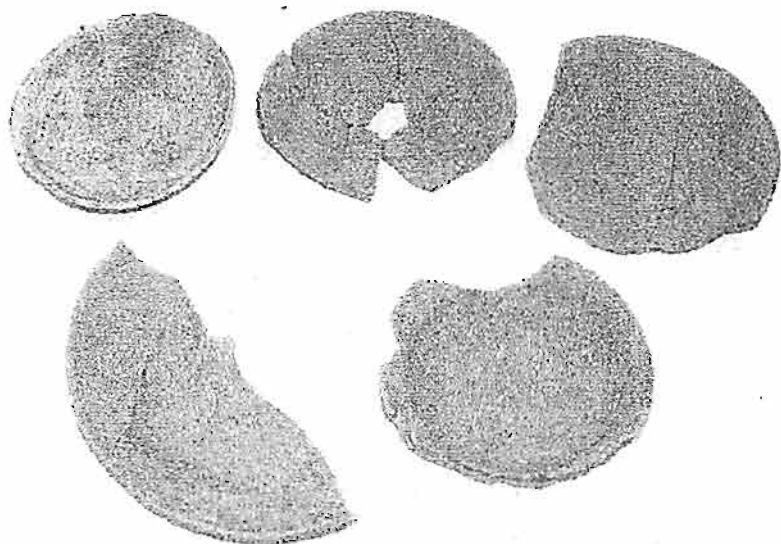
167次調査区全景(北から)



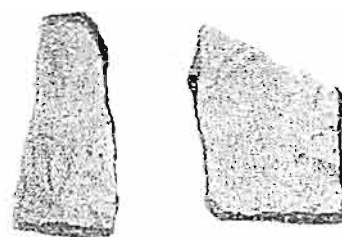
斎宮跡第167次調査区遺構配置図

3 出土した遺物

第 167 次調査では、整理箱で約 12 箱ほどの遺物が出土しました。出土した遺物は大半が土師器の杯・皿・甕などでしたが、緑釉陶器や紡錘車も見られます。緑釉陶器碗は、両面に花文が印刻されたもので、高級品であったと考えられます。また、紡錘車は糸を紡ぐために用いられた重りで、石でできており、表面は丁寧に磨かれていました。



土師器



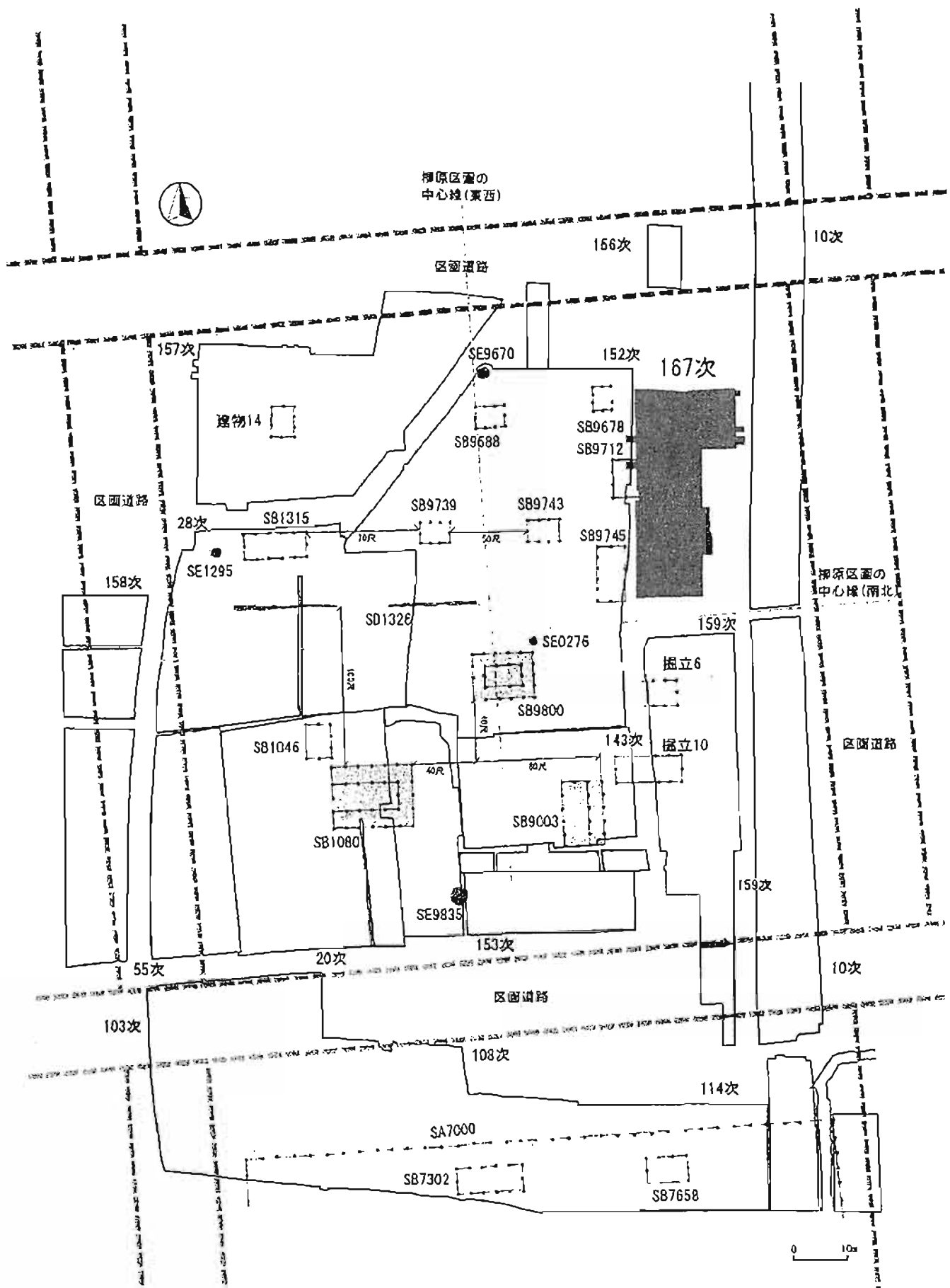
陰刻花文緑釉陶器



石製紡錘車

4 今回の調査のまとめ

第 167 次調査は、斎宮跡の中核部である「柳原区画」の北東部にあたります。今回の調査では、総柱の建物を含む 10 棟の建物を確認しました。「柳原区画」では、これまでの調査で区画南半に四面庇付建物などの庇を持つ建物群が見つかっており、これらが区画の中心的な機能を果たす建物と考えられます。今回見つかった建物は、こうした建物群を支える施設や倉庫であったと考えられます。



柳原区画の9世紀初頭頃の主要遺構配置図

5 斎宮跡の史跡整備について

三重県では、平成 26 年度の完成を目指して、「柳原区画」を中心とした斎宮跡史跡東部の歴史公園整備計画を進めています。その基本計画書では、これまで行われた発掘調査の成果をもとにして、平安時代の建物や方格地割の大きさを実感できる整備を考えています。史跡整備を進めていく上では、地元の方々や明和町をはじめ、斎宮跡に興味を持っていただいている多くの方々と共に、より良い整備・活用を考えていきたいと存じます。どうぞ今後の斎宮跡の史跡整備にもご期待・ご協力下さい。



史跡斎宮跡東部整備計画図